

CanCanミーティング2020

地域で“暮らす” “生きる”を支援する 外来看護

2020年

12月22日 火 13:30-15:30

講師

宇都宮宏子 (うつのみやひろこ) 氏

(在宅ケア移行支援研究所 宇都宮宏子オフィス)

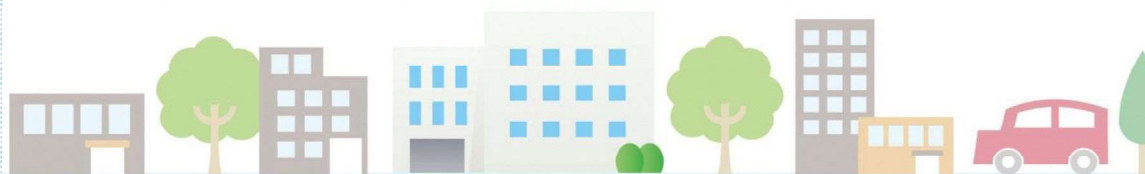
【講師略歴】

1959年福井出身

1980年京都大学医療技術短期大学部看護学科卒業。

看護師を経て訪問看護師に。2002年より京都大学
附属病院退院調整看護師。2012年在宅ケア移行支
援研究所を設立。

日本の在宅療養移行支援のパイオニアとしてご活躍の
宇都宮氏と今どきの外来看護の課題ややりがいを共有し
熱い応援メッセージをいただきましょう。



お勤め先でご参加いただく **WEBセミナー** です！

* 参加方法につきましては、案内文書でご確認ください

協力：しばた地域医療介護連携センター、三条市地域包括ケア総合推進センター、
つばめ・やひこ医療介護センター (順不同)

お申し込み
お問い合わせ

新潟市在宅医療・介護連携センター (新潟市医師会内)

E-mail renkei-center@med.email.ne.jp

TEL 025-240-4135

地域医療連携強化事業

「CanCan ミーティング 2020～地域で“暮らす”“生きる”を支援する外来看護」

開催日時：令和2年12月22日 13:30～15:30

開催手段：
オンラインセミナー

○内容

1. 講演

「外来で始める在宅療養支援～地域で“暮らす”そして“生きる”に伴走する～」

講師：在宅ケア移行支援研究所宇都宮宏子オフィス 宇都宮宏子

2. 話題提供

- | | | |
|---------------|---------------|-------|
| ・信楽園病院 | 外来看護主任 | 伊与部由里 |
| ・県立がんセンター新潟病院 | 地域連携・相談支援センター | 櫻井圭美 |
| ・白根大通病院 | 外来師長 | 若月美香 |

3. ディスカッション

Zoom を利用し、市民病院、在宅ケアクリニック川岸町などから発言をいただくなど、意見交換を行った。

○参加者 230名（70 端末→病院 38、診療所 5、その他 17）

○参加者の反応（アンケートより抜粋）

- ・入院前からの継続的な関わりが大切であると気づきました。
- ・本人や家族との“対話”を意識して、意思決定支援を行いたいと思いました。
- ・リモートで研修を受けることができ嬉しく思いました。
- ・当院の外来で実践できることは何かを考えるヒントがもらえた。
- ・ACPのタイミング、患者は生活者であり対話が大切であると学び、外来全体で考える必要があると学んだ。
- ・講演だけでなく、地域の具体的な取り組みとディスカッションすべて良かった。
- ・外来での気づきを大切にしたいと再確認できた。

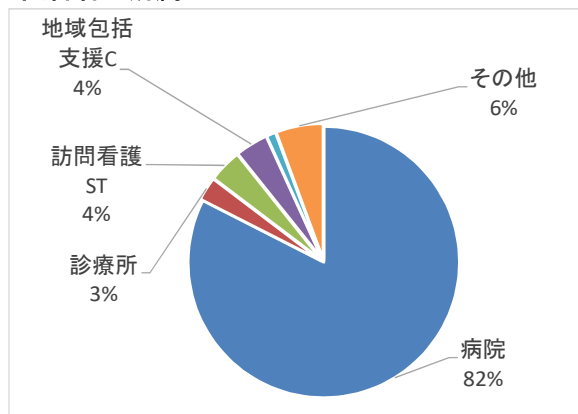


CanCanミーティング アンケート結果（令和2年12月22日オンライン形式）

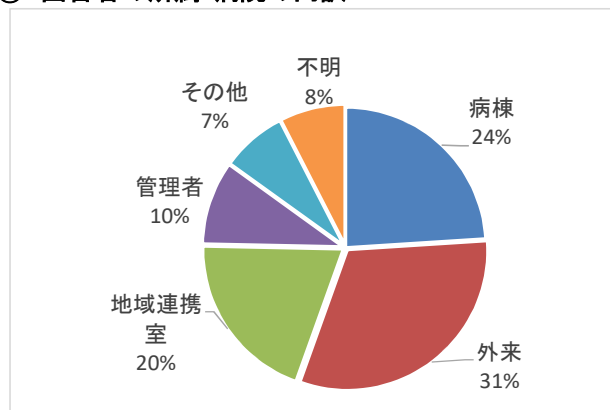
（申込施設：病院38・診療所5・その他17 申込人数：230人 回答数：177人）

1. 参加者ご自身のことについてお尋ねします。

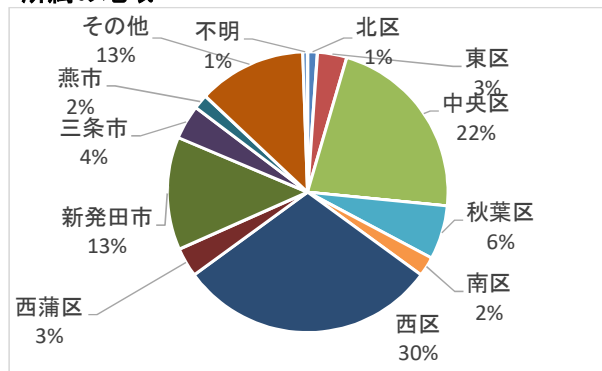
① 回答者の所属



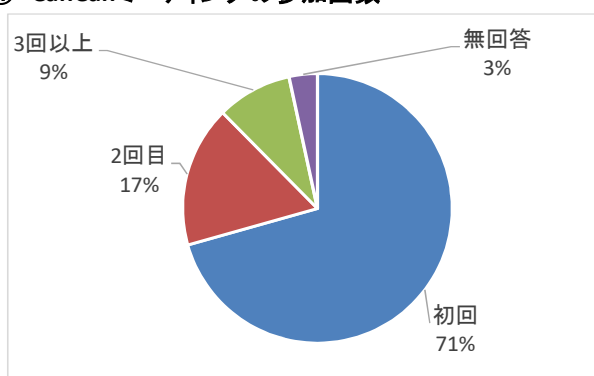
② 回答者の所属：病院の内訳



③ 所属の地域

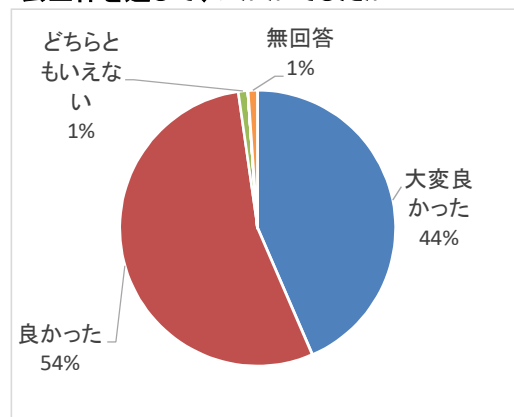


④ CanCanミーティングの参加回数

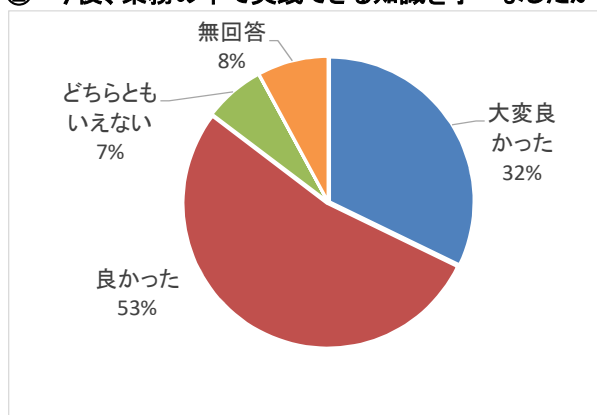


2. 本日の研修会についてお尋ねします。

① 会全体を通して、いかがでしたか



② 今後、業務の中で実践できる知識を学べましたか

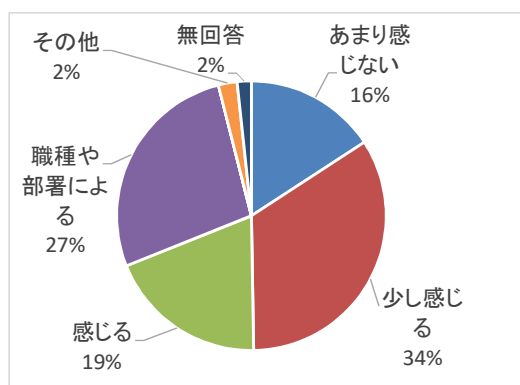


③ ご意見・ご感想(一部抜粋)

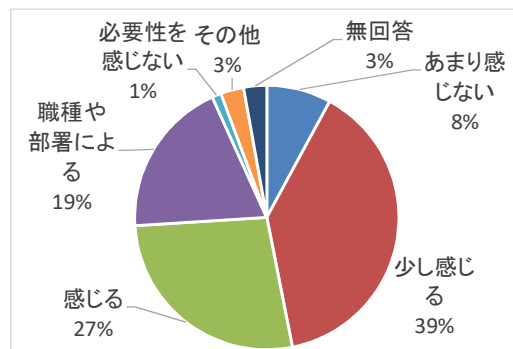
- ・在宅療養を支援する上での外来看護の役割や視点がよく分かった。患者との対話では。生活の視点を忘れず、対話からの気づきを次につなげていけるよう少しずつでも関わっていききたい。
- ・医師や家族の意見だけでなく、本人の思いや今の暮らしをどうしたら継続できるか、必要なことは何かということを考えながら患者に接していこうと思った。
- ・昔と違いがんを本人に伝え、本人がどのようにこれからの人生を送りたいか、それにはどのような支援が必要か看護師としても悔いが残らないようにチームでサポートすることが大切だと感じた。
- ・その人が望む暮らしの中で何が必要なのか自己決定を尊重する文化をつくっていくことが重要であること、外来では計画的に関わる仕組みが必要であると学びました（訪看と外来の定期ミーティングなど）
- ・受診時、外来看護師が本人と対話した中で得た情報と、在宅での状況を共有する場面をつくる必要があると思った。
- ・入院した時から在宅に向けて支援できるよう患者と対話し、外来とのつながりを強化できればいいと思った。

3. 現状についてお聞かせください。

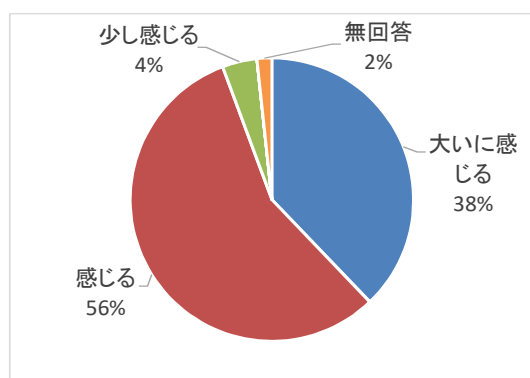
① 自らの機関内の連携のしづらさを感じますか



② 外部機関との連携のしづらさを感じますか



③ 病院・診療所・訪問看護・介護事業所等による看看連携研修会(あるいは情報交換会)について、必要性を感じますか



④ 病院・診療所・訪問看護・介護事業所等による看看連携研修会(あるいは情報交換会)について、必要性を感じますか(一部抜粋)

- ・病院、在宅相互の共通の認識を持って支援にあたるのが大切だと思う。病院、在宅の一貫した支援ができないと当事者が困ると思う。
- ・顔の見える関係づくりが重要で交流が進むことでお互いの理解が進むと考える。
- ・住民が地域で暮らしていくためには多職種連携ももちろんですが、コアとなっていく看看の連携は需要と思います。また、それを多職種に知ってもらうことも大切だと思う。
- ・介護事業所が病院に求めること、病院が介護事業所に求めることのギャップを感じている。
- ・看護職でも所属により視点が異なることもある。また在宅での生活を支えていく上で研修会や情報交換会を通して連携を深めることができる。